特定非営利活動法人
おきなわグリーンネットワーク

農家の視点で赤土等対策に挑む！
子どもたちへの環境学習で繋ぐ沖縄の未来。

代表の西原さんは、元々は漁協勤め。その後、不動産関係の会社に転職するが、思うことがあり、県・水産課事業の臨時職員に応募し再び海の世界へ。と思いきや、赤土等対策に関わる業務に就くこととなり、水産課にいながら陸地の仕事に携わることに。地域協働でグリーンベルト植栽に取り組んだことがきっかけで、水産課事業の任務終了後NPO法人を立ち上げ、現在の活動に至っている。

赤土等流出による影響

美しい海に囲まれた沖縄で、サンゴ礁の保全を突き詰めていくと、実は、大地の問題へと行き着く。

赤土等の流出は、雨が降り、土壌が侵食されることによって始まる。やがて、雨水とともに河川に流れ込み、海へと流入して拡散。赤土等が堆積するとサンゴは光合成ができなくなり、生きているサンゴが減少、そこに隠れ棲む魚たちも姿を消してしまうことに。漁業・水産業では、濁りによるもずく収穫の減少や定置網へ付着する被害もみられ、沿岸部などが赤く染まり、景観が悪化する問題も起こっている。さらに、陸域（農地）からの赤土等流出は、土壌の劣化による農業への影響も懸念される。

農家の視点を大切にしたい

赤土等は84％が農地からの流出と言われているが、その対策には労力や費用などもかかり、農家負担が大きいため普及はなかなか難しい。実現に向けては、対策がメリットに繋がるよう農家の視点も必要だと感じ、当初那覇に構えていた事務所を、農業の盛んな八重瀬に移し農業の勉強にも取り組んだ。その中で農家やJAおきなわとの接点も増え、そこからつながったグリーンベルト植栽も始まっている。（グリーンベルトとは…裸地や畑の周辺、斜面の下側などに、樹木や草木などの植物を帯状に植えることにより、水の流れを弱めたり、濁水中の土粒子を補足し、赤土等の流出を防ぐ解決方法。）

農家とのやりとりで分かったメリットがある。かぼちゃは、敷き草と風よけが必要で、ススキを刈り込んで土に置くことが多い。その代用として、かぼちゃ農家がグリーンベルト植栽に適したベチバーという植物を試したところ、とても使い勝手がよかったそうだ。対策が農家のメリットになれば、普及の加速化に繋がるかもしれない。農家のニーズに合わせて取り組みが持続できたら、それが1番いいと考えている。

カテゴリー	環境保全／子どもの健全育成
住　所	島尻郡八重瀬町富盛301 コーポ富盛201号
電話番号	098-943-3223　設 立　2013年　人 数　13名
主な活動	赤土等流出防止対策活動の普及・啓蒙活動、人材育成
利用施策	地域づくりイノベーション事業（R2～3年度）
受賞歴	沖縄都市緑化月間 亜熱帯緑化事例発表優秀賞（2013年）、 沖縄県環境保全功労者表彰（2018年）

赤土等の問題はもう終わったこと？

“おきなわSDGsパートナー”として取組みを推進するJAとも連携できればと、直接話に行ったことも。そこから、クラウドファンディングを一緒にやろうと発展したが、結果は達成率30%となかなか厳しい結果となった。「もしかすると、赤土等の問題は昔のことで、もう終わったのだという認識が県全体にあるのかもしれない。県民への周知・啓蒙活動にも改めて力を入れなければ。」と決意を新たにできたそうだ。

未来を担う子どもたちとの環境学習

沖縄の未来に向け、子どもたちへの環境学習にも積極的に取り組んでいる。赤土等は沖縄の文化や農業に欠かせない宝物、決して赤土等が悪いわけではなく、大切なのは、色んな視点や人の立場になって考えてみるということ。事前アンケートでは、赤土等流出について知らない、との回答が7割にも及ぶが、子どもたちは飲み込みも早い。「自然環境と自分たちの暮らしは繋がっているんだ。」「赤土等や農業の大切さがわかった。」「学んだことを、おじいおばあにも教えてあげよう。」と柔軟に受け止めてくれている。沖縄の未来は明るい？！のではないだろうか。

県内小学校でのこういった取り組みは、8年間で100校以上に及ぶ。「人材育成などと偉そうなことは言えないが、環境を守りながら地域活性に貢献できる大人になってくれたら。」との願いを込めている。

また、県外の子どもたちに対しても、民泊体験の中にグリーンベルト植栽と農業体験を組み込んだプログラムを提供しており、旅行会社からの問い合わせも増えている。「沖縄で起こっている赤土等の問題を、自分事として捉え、考えてくれたら嬉しい。」と話す。

出前講座の様子。この取り組みは8年間で100校以上に。

持続的な活動にするために

環境保全と暮らし、そして教育がリンクする持続的な社会を目指し活動しているが、そのためには自立できるだけの収益を確保する仕組みづくりが必要だ。沖縄県の赤土等流出問題の普及啓発活動等を目的としたマスコットキャラクターの「もっちん」を活用し、環境に優しい農産品としてブランド化を図り、販路までセットで提案できないかといったアイディアを検討している。「難しい課題だとは思うが、これからも農家さんや地域と二人三脚で挑みたい。」と最後に力強く語ってくれた。